層雲

冬季號

荻原井泉水主宰

第三十四卷
第五號
昭和三十一年十二月一日（毎月一回一日）發行
昭和三十一年十一月二十五日印刷納本

層雲

第三十四卷　第四・五號　通卷第四〇〇・一號

思想

「一つ……」と氣輕に乞はれて、「さア」と氣輕に與へる。これほど、好い氣持のことはない。それは煙草の火だ。乞ふ方では、必ず與へられると知つて乞ふのであり、與へる方では、與へることに依つて少しも損はしないのである。かういふ氣持の好いことは煙草の火、以外にはあるまい。

いや、ある。思想といふものがそれだ。思想は、それ自身がしづかに燃えてゐて、他にそれを傳へて、ひろまりたい火のやうな性動をもつてゐる。たゞし、それは人から「求められ」た時に、初めて人の心に點火し得るのだ。私は、煙草の火が人の口から口に傳へられるのを見て、ふと「以心傳心」といふことばのほゝゑましさを感じたのである。

――井泉水――

鐘の音

井泉水

けふは建長寺の開山忌なので鐘を二ヶ所で打つてゐる。一つは、毎日の明けと暮れとにうつ山門わきの大鐘であり、一つは法堂わきの鐘であるが、その音色がはつきりと違つてゐる。一つは、大きく底力のある音だけれども、重くてにぶい音だ。一つは、さびといふ味には乏しいけれども、澄み通つて鋭く心をうつやうな響がある。

×

鐘といふものは、その體に具つたる音を出す。大きい鐘はどつしりとした音を、小さい鐘はかるがるとした音を出す。だが、その金質に佳いのと悪いのとがある。粗質の鐵のものもあれば、純金をふくんだものもある。鐘の表面にあるいぼも單に裝飾ではなくて、其の數と位置とがやはり音色にひゞくものだといふ。蓋し、人間と雖も、鐘と同じことである。

×

鐘といふものは、たゞだまつてさがつてゐる。見ればおろかものの如く、無用の長物の如き觀がある。自分で進んでは、一言をも發しない。だが、人が之をたゝけば、必ず答へる。すなほに、正しく、又あるべきやうに答へる。私は、かういふ鐘のやうな人間でありたい。

×

總持寺近世の高德に奕堂和尚といふ人がゐた。和尚が一小僧として寺にはいつた時、朝の鐘をつくことを命ぜられた。或る朝、師僧が其の鐘を聞いて、けさは誰がついてゐたか、けさの鐘の音は大さう好い、其の音に魂がはいつてゐると云つたといふ談がある。

×

鐘には鐘そのものに具はつた音があるものゝ、其を打つ打ち手に依つて、好い音も出るし、悪い音の出ることもある。これは打ち方の上手下手といふこととは違ふ。木琴ならば上手な打ち方や下手な打ち方があらう。鐘といふものは、眞正面から眞正直に打つてかかる、全人を以てぶつかるからこそ全體的な響を發するのだ。魂を以て接すればこそ魂をもつて答へるのだ。人間とても亦、その通りである。

――一九四六年四月――

蔦温泉まで

荻原井泉水

○十和田を源とする奥入瀬（オイラセ）の流はうるはし

馬に子馬のゐる植ゑてゐる代掻いてゐる（三本木より）

家があるとあやめふいて奥入瀬の奥へなほ道

いこうて楓の實生も楓の大樹であるその根（燒山より）

たべて、流れてゐるそれを呑んで去ぬる

はし、ながれとわかれてわかばへ一あし一あし

もすこし行くと好い木かげの好い石のありさうな、道

木の影、光、あやなす影、遠雷をきく

その中は米つり竿のその先若葉に君負うてゆく

○蔦温泉に着きて一泊

けふは早く着いて座敷はあるといふ水にあやめ

青葉若葉座敷で米を量りて與へ

かはやは川の上にあるにうぐひす

湯の流と水の流にはわらびひたしてある

碑陰に忌日も青葉いまごろの清文院桂月鐵脚居士

かつこう、桂月の墓、宿にて彼の醉筆を見る

木の間には湖の色のなほ行くに藤のかかり

みづうみそれからはわらびとりの行くだけの道、かへる

いましごろ殘るさくらの、山杖は樫を伐る（昭和廿一年六月六日）

麗日壇

井泉水選

海が遠くなる近くなる夏へレール二本　伊東俊二

麥は穂が出たトタンの小舍は錆びてゐる
戻つて脱いで洗つて干して一枚のシャツである
なまあたたかい心が鏡をもつてゐて夜
ひとり鏡の顔を死んだ子が生れた日で
手を頭の後ろに組んで空が青いばかり
木の中にある木の花と白いてふてふ
寄宿舍のオルガンが木には星がとまつてゐる
踏切番しながら育てた子が還つてきた畑の葱　池原魚眠洞
鐘がなると日がくれて山の松の木
ひと吹き吹雪おさまればあらうみ
日の入りまでといふ渡船に少し日ののびた川瀬の杭
道にあげてある舟も何とか新田といつた家があると海苔干してゐる
凧のうなりに凧のゐる下を通つてゆく
葉蘭白うしてやんで雪の暮れてゐる
煙、鶏追ふこゑ鶏の追はれるこゑのしてゐる
渡船から見えてゐたこれが猫柳そこに蕭く
ひらいて渡すからかさの、なつのあめ

旅の茶ばなし

井泉水

奥羽の旅に出立。私としては久しぶりの奥の細道である。丁度、季節も、奥の細道のころであつて、けさは梅雨ぐもり、降らねばいゝと念じながら十一時四十分上野發すこし後れたものゝ、夕べ十七時半、白河着。「都をば霞とゝもに出でしかど……」の大昔とはちがふものゝ、車中の混雑と困難は能因法師も芭蕉も知らぬ苦勞である。

×

白河の驛を出ようとすると、改札口にせきを作つてあつて、にはかに人を通さない。東京方面から來て下車する者には、DDTの消毒をする。それのすまぬ内は、此の關一歩も外へ出さない、と云ふ。――いかにも、今も昔ながらの白河の關である。

これも宜し、これをやつておいてもらへば尿前の關に行つても「のみ、しらみ」の御難も免れる譯と、すすんでネクタイをはづして、えり首の奥までフンム器で消毒してもらふ。すると、「DDT消毒濟」といふ

からすの喰ひのこしの柿をとつてはたべつ秋のゆく

木村緑平

石、そこにも日があたるやうになつてきた石蕗さく

飯尾青城子

うちにもすこし紅葉した木はあつて雨の日うちにゐる

田中井夢

机の灯半分わけてもらつて編棒うごかしてゐる奥さん

近木黎々火

もう兵隊ではない角帽で櫻並木の坂が落葉で（描立夫）

佛様のも預金にゆく梅が盛りになつてゐる

傘さすほどでもない月あかり傘さして船で來る人を

いくさの痕も寺のそこここ、水こんこんと湧く

麓まで下りてきて配給物をばつくつくぼうし

木の芽ふつてやんだ水だまり降つてゐる

ビルがのこつただけの燒野原月夜壁の掲示は讀めてとほる

ここまで海の激するしぶきがつばのはな

みちみち家が灯をつけて雪になりさうな山ばかり

うそでかためた世をわたるをんなとしんじつさむい晩

麥がのびる山のはたけの日がのびた松の木、と墓

船のけむりのかかるのも島の青い麥雨がふる

雲と休日の煙突と櫻が咲いてゐる二階

けふは櫻が雨の看護婦長さんと私のカルテ

川の面昏れないでゐる花を摘む

船が灯る港の丘にある二階

家から出て目の前を通つてゐる道

大きく風ふく木が夜を一人通る

傘をもち雨がしみ透つてゐる木々

一票了へて壺に花のあるわが部屋

枯れたものに雪のふる日の朝

紫色のスタンプをぽんと手首におしてくれる。これが卽ち當今の「手形」昔關所を越すになくてならぬもの。

×

白河では、福南新聞主催の座談會。二十餘年前、奥の細道の跡をこくめいにたどつてあるいた時、白河の關まで、芭蕉はどの道をあるいたかと考證しながら、歩いた談を する。その時は、關の細道に、卯の花が咲いてゐた。その卯の花は芭蕉が「卯の花の白妙にいばらの花のさきそひて雪にもこゆる心地ぞする」と感じた卯の花だから、うれしかつたのだ。今日といへども此の卯の花は古關の道になほ咲いてゐるにちがひない——と私は談した。談終つてから、聽衆の一人が、自分は善方牛臥城の友人だが、牛臥城がこのごろ、臺灣から無事で歸つてきましたといふ。牛臥城は、私が白河の關跡を尋ねた時案内した一人である。今日の白河は一人の同人も居なくて淋しいが、層雲として舊い彼の健在を知りえたことはうれしい。

（六月三日）

×

けふは雨。八時、白河を立つて、夕の十八時まで、十時間、乘りづめにて北を指す

つるはしは唄で揃つて彼岸近い浪音も　堀英之助

お婆さん日向の針の穴がまぶしさうな雲雀の聲　小谷信夫

出水あとの畦豆毛ぶかくよごれてゐるのも晴れ　酒井仙醉樓

焼けたところも焼けないところも天の川南北　橋本夢道

塀かど石が一つ降る日は濡れてゐるを曲る　柳田流矢

雨が風をもつてふりにふる山吹いよいよきいろ　巣山鳴雨

谷の流の其の水のあやめ咲く池である　古林巴水樓

松のはづれは海のいろ春先の波をあげる　淨心寺惇

櫻が夜になり朝になり病人安靜

だあれも來ないなんにも來ない松は緑り

賣るものぼつぼつ賣り身のまはり涼しく

麥畑に桃の花咲く郵便夫のくる道

あの山のはだら雪やこの山のさくらばなや旅

ふるさとは春の日が一輪山に沈んでゆく

湯屋と云つても湯がない日の葉のない柳

朝すこしふり夕すこしふり焼けあとの木の雪

かぢ屋がまたかぢ屋をはじめて枯菊あたたかし

月夜が椎の花が匂ふやうな四十九日がくる（蜻郎逝く）

いちはつ咲くころの、君と旅の或る日は雨の宿（追憶）

横丁を曲ると映畫館があつたり師走の街をインバネスで

馬がかいばについてゐる道端のこぼれ菜の花

西窓が少し照りつつ花菖蒲にまだふる雨

葉蔭すく日の實をもつた梅の奥のいほり

煙草屋の娘もどこかへ勤めに行く桃はつぼみ

カバンはみ出すほどの郵便物なら遠い堤の櫻

福島、仙臺、鹽釜と奥の細道の跡を車窓に眺めて、仙臺のさんたんたる焼跡におどろく。芭蕉の見た木の下藥師、天神の祠など凡て、今日では再び逢ねるよすがもなくなつたことであらう。平泉では「夏草やつはものどもが夢の跡」の吟が、二百五十餘年後を豫言したやうなものだ。芭蕉は、平泉から引返したが、私の汽車はもつと〳〵北へゆく。此の邊、田植時であつて、代田をかく馬、苗をさす人達、それから既に植ゑをはつた田がまん〳〵とした水をたゝへて美しい。故橋本關雪が、日本の風景として一番うつくしいのは、田植時の水田の風景である、と云つたことは同感である。

×

奥の細道田は植ゑわたりなほ奥へ行く

×

花卷といふところに下車したのは、はじめてである。こゝに、花卷新俳句會がある。白羊城、灰人、大峰、吟雨、宏、一相等、なかなかにぎやかである。近在から不來鳴、遙子も來會。大峰のお寺、宗青寺を宿と定めて、夜は句會及び座談會。遠く蛙の聲がきこえて、水音こそきこえないが、門前近いところに北上川が流れてゐる

栗の穂風ふいて夕日になるまで吹いて一日　原蝦蟇子

はたけ茄子の花花咲いてけふ里神樂きこえて曇り　青木青華

池に藤がさいていくさのあとの茶店のみつ豆　一色如佛

傘さしてひとり廣前の青葉青しとも青し　佐々木石々

屋根に屋根やさんが枝に小鳥松のしんはのびてゐる　井上一二

帆船が來ると舟橋のあく空が梅雨時の夕明り　石田白亳子

先生とけふ山の鳩をきき杯をもつ（迎井師）　原農平

よう來てくれて蛙ばかりな夜の蛙をはなし（吾亦紅に）　池田詩外樓

かつこうなくのもちよいちよい來るとて別れて行く　財馬呵歩

銘は「ひと筋」茶杓は貰うて竹に雨ふる

春雷、松の芽がどしやぶりになる

醉ざめのみづは月夜らしい山鳩ないてゐる

星座正しく六月の空でいい映畫でした

柿若葉の今日は參觀に來て吾兒のゐる教室

子の目と母の目とどの目もほほえんでゐる教室青葉

しづかに陽があふれてゐる滿開の梅

こうもりに花びらついてきた雨の晴れた橋をわたり

いろいろ出してネクタイのいろ風が夏めく

葉であつて陽がさして多である

葉でありまだ動くもののゐるには早い水をたたへた池でありこたつで三人の三ツの本、冬の夜は川のおと

村のたれかれ復員する今日もひとりまた菜の花に月が出る

水にも青い空のわらびはあくぬいておく

青麥に障子あけて遺骨迎へる座布團

猪がこんなに食べていつた筍掘つてゐる

のだと思ふと、奥の國ふかく來てゐるといふ感じ……明け方は冷えますからと云つて、掛布團は厚い物を掛けておいてくださる。

（六月四日）

×

カツコウの聲に目ざめる。起き出て、北上川の堤に行く。これに添うて、瀾川といふ小川がある。此堤が青々と茂つてすずしい。そこを心ゆくまで散歩。あざみの花、なづなの花、栗の花、麥の穂、黍の苗、うぐひす、春蟬、かつこう……俳句になるべき取材だけは拾つておく。

×

花卷は宮澤賢治が生れて、こゝで仕事をしたところだ。「雨ニモメゲズ」といふ彼の詩は人の好く知つてゐるものだ、あの中にある……

ミンナニデクノボウトヨバレ
ホメラレモセズ　クニモサレズ
サウイフモノニ　ワタシハ　ナリタイ

といふ、かういふ人こそ、今日の日本の農民の間に一ばん要求されてゐるものではないか。私は、かういふ人をこそ、日本の「大地の鹽」たる人だと云ひたい。現在、地方の到るところに、農民文化運動が提唱

かつこうではないふくろうが鳴いてゐるさかづきおいて先生（井師來縣）　高橋良太郎

いまはの母にもどりてわかると言ふ母の前（母の死五句）

今宵死ぬべき母をはなれて木苺ほのかな花白し

通夜かわりてねむるすでに明けてゐる青葉

青葉のうへ山の雪七十三年の母をおくる

麥の穗すでにけむりあがるをうしろにす

おもはぬところへ日のさしてゐて春めく家のうち　大越吾亦紅

木々の芽山の水ひいて住みていへいへ

どこかに人聲木々の芽の月夜なしてをる

春の夜十時を時計がうつて隣もうつてをる

春蘭二株掘つて山をわが家へ下りる　井手逸郎

根株へ腰をかけさうして山越してゆく

わたしのみちがけふはむめのさききつてゐるはたけ

しづかにひとりの道日あたつてゐるところ山のむめさく

むめのさいてべえべの仔に日あたり　筒井勁吉

行くにあられのふる汐釜さまの松、通るにその根もと

漁師町が多雨のはれ間日が照り出していへと帆ばしら

うめのつぼみあるひはもうさいてゐて麥のはたけ

それからは夜が凍るばかりのふすまのちらし松葉　東松八洲雄

怕いやうなそれでて胸のときめく妻とすつぱいみかん

女がしづむとあをい湯繪硝子の花がわれてゐる

青い空とても敗けてからの口紅濃くしてゐる

でんきが來てくれないすこし醉つた蠟燭とするめのあし

苗代は牛のかくこのへん雨の日桐の咲く（高知）

傘かりて風呂には少し遠い梅の實の雨（道後）

されてゐるが、かつて、戰爭でワイ〳〵云つてゐた心を裏返して、たゞ、文化々々とはやし立てゝゐるだけでは意義がない。諸方でさかんな青年演藝なぞも、單なる素人芝居のなぐさみに終らないで、これをホントウに藝術に入る道となさしめなくてはなるまい。今日こそ、第二の、第三の宮澤賢治が出て來なくては、日本は救はれないであらう。

×

午前中、花卷女學校で一席の談をして、午後は又、汽車でなほ北へ北へ……野邊地を過ぎて淺蟲に着いたのは十九時半。日の永いさかりであつて、海の上にある湯の島はまだうす青く、かつて爰に來た時の舊い記憶がそのまゝ、そつくりと水に影をうつしてゐた。其時の作に――

島の綠なす水に顏よせてはうに採り

十五年前のこととおもふ。

×

宿は吉田屋――弘前から石雨、青丘、五所川原から石路が來て私を待つてゐた。ここで明日以後の、八甲田行の日程の評議をした。はじめは、青森から入る企畫を立てあつたのだが、省營バスが殘雪のために

玉垣の阿波屋寅之助なんども時代めいて若葉の雨（琴平）　福岡灰斗

風に松の花粉が、なるほど木魚ははげてゐる（南郷庵）　井上充夫

素足朝の土代かきにゆく馬と行く　木戸夢郎

早苗かよはき田の土のやはらかに植うる田からあがつた夕の素足の四五人でかへり先生早苗持ちて素足でわたしたちと此のひととき（井師田を植う）　鈴木蜻郎

みづうみの月夜の若葉の匂ひするを逢ふてゐる

春がそこまで來てゐる影が屋根に屋根幹に枝ひさしのかげとひなたと土とものの芽と塀があつて梅の木さいて梅の花けふの空よんべ雨をもらした屋根に上り春も半ばをすぎてゐる目をとぢると明るい青い葉目をあくと風がある葉

齒醫者の看板とバスの時間表と此村の梅のさかり

暮遲い日の暮れる頃のけものの匂ひが裏口

なんにもない月だけの空の月がかけてる

揭げてもよろしいといふ國旗けふは東風がふく

石に動く木の影が春

燒けて無い街の番地など海の見えて菜の花など（神戸）

ゆうびん隣へきてうちへきて八ッ手のはな（遺稿）

ラヂオの解說が婦人參政權柿の皮むく

松蟬ないて松山このへん戰場にならう噂も

かぜ晴れがして山、配給の小魚四五枚は干しておく

食べてたべのこして入れておく戸棚、多

敗戰、それから日の經つにつけ今更枯木にくも

私が病人でゐることを隣近所山茶花咲きつづく

まだ通しないといふことが解り、三本木まで逆もどりして、十和田行のコースからはいることに決めて、翌朝は早いので、早く床につく。海はすぐ枕元にあるのだが、浪の音がバサリともしない。（六月五日）

×

五時、一浴、六時、出發――石雨は九日の大會の連絡のために弘前にかへり、青丘、石路の二人が私と同行する。青丘のサックには四日間三人分の米と酒一升、なか〳〵重たさう。それに、山でイワナを釣る竿も添へてある。石路のサックには私の着換へ、手廻りの物を一しよに入れてもらひ、私はスケッチブック一册を手にもつだけの身輕さ。水筒には、途中用の酒をいれて、「此の日一瓢を肩にして」といふ古風なる氣分で……。

×

三本木からバスで燒山まで――此邊も田植のさかりだ。奥入瀨の溪流の水を引いて、山峽の入りこんだところまで、植ゑすすんでゐる風景は、又、一だんと日本風の繪畫である。代かきしてゐる馬が子馬を連れてゐる、母馬がはたらいてゐるうちを長閑に立つてゐるのもかはいゝ。三本木は日

朝は家のまわりはいてゐる春　井關多人
學校のさくらうしろの山のさくら　前川紅二
白さは夜の浪年とつて故里に戻り　松村邦夫
移つてきて春、漬物石は置いて來た　窪田三洞
紅梅は夕べのあかりがつき池の水　矢内樹一
燈臺を遠く松ばやしところどころ桃さいてゐ　天沼棗人
早春ひなた雨するを葡萄の蔓きり　中里春雪
麥の穗の中の住居ときく尋ね行く道の麥　田代俊
手にして椿の一りん、思ひ出すことがある　老沼馥生
吾妻裾原木の芽曇りの山羊の子よ　金子蕗郷
燒あと鳩が飛んでゐる白い鳩で春雨　三浦香女
鋸屑一ぱいな木挽小屋は桃の木一本　平岡國次郎
蛤掘るに潮が湧いて來る中のはまぐり　片岡樹裏人
厄日が過ぎた粟の穗稗の穗靜かに雨　夏堀望子
便りが雪降る日の娘の郵便やさんで　原實
船、が着いて月夜で港の山の背
わすれられてさいてちつてる
はなたたくあめがひるのいなづま
二度目の雪も消えてしまふ自給製鹽の煙出し
鰊のにほひは港の灯は雪まじりの雨のふる
春の雪ふりわらうち砧の音がとなり
櫻の降る雨のうちの小米花にふる
野いばらの實のごげいろなぞもみづおと春になる
匂ふて散つてあたたかな雨ふる
柳芽をふくどうしても戰災の東京へ歸るといふ

本屈指の馬の產地である。

×

燒山でバスをおりたのが正午近く、奥入瀨の水のほとりで晝飯にする。水筒の酒一杯、奥入瀨の清流を掌に一杯。――それから十和田橋をわたり、蔦橋をわたりて、山間の道にはいる。青葉のかげの美しい道。日は高し、宿までは僅に一里八丁。藤の花ところどころに咲き垂れ、はこねうつぎ、道に咲きこぼれる。

×

蔦溫泉は林間木ぶかきところに宿があると聞き、朝鮮金剛山の溫泉を想像してきたのだつたが、思ひのほかにカラリとしたところだ。十年前に來たといふ青丘の云ふに、多分增產のために木を伐つたのだらうと。だが、明るくなつたといふことも惡くはなからう。流をひいて池を作つてあるほとりには、しようぶが咲き、つつじが咲き、櫻もまだ散り殘つてゐる。此の溫泉は、故大町桂月が大さう好きで、こゝに居ついてしまひ――蓋し、文士疎開のはじめであらう――遂にこゝで歿した。そして、それに依つて有名になつた。薰花の伊香保、紅葉の鹽原とはちがふが……。